

## 2014年11月9日 礼拝メッセージ

聖書：ルカの福音書 20 章 1～8 節

説教：何の権威によって

### 1 祭司長たちの質問

#### 1) 目的

イエスはろばの子に乗り、人々から大きな歓迎を受けながらエルサレムに入られました。この様子を見て、苦々しく思っていたのが祭司長、律法学者、長老と呼ばれている人たちです。ユダヤ教指導者として最高の権威を持っているとのプライドを持っています。今日の舞台となっている神殿は、ユダヤ教の総本山です。彼らにとって最も大切な場所です。そこへイエスがずかずかと入り込んできて、祭司長たちに何の断りもなく、いきなり商売人たちの追い出すようなことをしました。そればかりではなく、神殿の中にどっかりと腰を下ろして、人々を教え始めます。たとえて言えば、イエスはほかの「組」の縄張りに挨拶もなく土足で入り込み、やりたい放題の勝手なことをしてシマを荒らしている。いままで我慢に我慢を重ねてきたが、もう堪忍袋の緒が切れた。イエスを殺すしかない。そんなふう、「組」の若い者がいきりたっていくようなものです。

けれども、すぐには手を出すことはできません。イエスはいまや国民的英雄です。イエスはイスラエルを大きく変えて明るい未来を取り戻してくれるに違いない。そんな期待を寄せています。そのイエスをいま殺したらどうなるか。暴動が起きて自分たちが殺される。そのことを恐れます。では、どうするか。人々の目の前でイエスに恥をかかせ、人々の心がイエスから離れていくのを狙います。そうなれば、堂々とイエスを殺すこと

ができます。

#### 2) 何の権威によって

そこで祭司長たちは、人々が見ている所でイエスにこう質問します。2 節。「何の権威によって、これらのことをしておられるのですか。あなたにその権威を授けたのは誰ですか。それを教えてください。」

たとえて言えばこういうことです。イエスはマンションのオーナーだったとします。そこにいる管理人はオーナーの顔を知りません。あるとき、管理人がつくった規則を無視して建物に入ってきた人がいました。管理人は怒り出します。「誰の許可をもらってここに入ったのか。」怒った相手というのがマンションのオーナーであった。そんな笑い話です。

彼らは、イエスがどのように答えるのか、三つの可能性を考えていました。一つ目はこうです。イエスがこう答えたとしましょう。「わたしは神の権威によってこれをしていきます。」祭司長たちは、鬼の首を取ったつもりで言うでしょう。「なんの根拠があつてそんなうそを言うのか。おまえは、自分を神であると言ったのだから、律法によって殺されなければならない。」

二つ目はこうです。「わたしは人間の権威によってこれをしていきます。」祭司長たちはこう言うでしょう。「私たちは、神からこの神殿の管理を委ねられている。人の権威でしていると言ったおまえは、神に逆らう犯罪者である。」

では、三つ目はどうか。「誰の権威であるのかわかりません。」たとえそう答えたとしても、イエスを罰するには十分です。自分が勝手にやっていることになるからです。どんな答えをしたとしてもイエスを罪人とすることができる。これが祭司長たちの狙いでした。

## 2 イエスの質問

1) ヨハネのバプテスマは誰の権威によるものか

イエスはもちろんそんなことは見抜いています。そこで次のように反論します。「わたしもひとこと尋ねますから、それに答えなさい。ヨハネのバプテスマは、天から来たのですか、人からでたのですか。」

このヨハネとは、いわゆる洗礼者ヨハネのことで、福音書の最初ところに出てきます。彼はヨルダン川で水で洗礼を授けるバプテスマを行っていました。イエスは、そのバプテスマは誰の権威によるものなのか、と尋ねました。これも先ほどと同じく三つの答えが予想されました。いずれも祭司長たちが自分の口で言っています。一つ目の答え。もし「神の権威によるものだ」と答えたら、周りに立っている人々は言うに違いない。「ならばどうしてお前たちは信じて、ヨハネからバプテスマを受けなかったのか。」

二つ目はこうです。「人の権威によるものだ。」もしそう答えたなら、人々は怒り出すでしょう。「バプテスマのヨハネが、神から遣わされた預言者であることは間違いない。それをお前たちは否定するのか。」そう言って、石を投げて自分たちを殺そうとするだろう。どちらの答えをしたとしても、人々の怒りを引き起こします。

そこで三つ目の答えをします。「どこからか知りません。」これならば、誰からも文句を言われることはありません。祭司長たちは、イエスがしかけた罠をうまくかわしたつもりでした。けれども、イエスはこう言います。「わたしも、何の権威によってこれのこゝをするのか、あなたがたには話すまい。」

2) 祭司長たちの怒りの炎に油を注ぐイエス

人々は、祭司長たちが苦し紛れの言い逃れで、「知らない」と答えたのがわかっています。ふだん、祭司長たちは権威を振りかざし、人を見下すような振る舞いしていました。イエスは、そんな彼らの鼻をへし折ったのです。それを見ていた人々は拍手喝采です。イエスの人気はまた一段と高まります。すべてはうまくいきました。

でも、手放して喜んで良いのでしょうか。イエスは、人々の前で祭司長たちに恥をかかせたことになるのです。恥をかかせられて、黙って引き下がるような人たちではありません。「あいつを絶対に殺してやる。」ますますイエスへの怒りの炎が燃えさかっています。そうなることをイエスが知っています。知っていてわざとそうします。ご自分が十字架に向かうために、怒りの炎に油を注ぎ込んでいきます。

## 3 洗礼者ヨハネ

1) 「主の道を整えよ」イザヤ書40章3節

その油の材料として、イエスはバプテスマのヨハネの名前を持ち出してきました。どうしてヨハネなのでしょう。祭司長たちをやり込める格好の材料だったから？ たまたま思いついた？ イエスはそのような方ではありません。大切な真理を教えるためにです。ど

んな真理でしょうか。

ルカの福音書3章で、洗礼者ヨハネについてこのように書かれています。「荒野で、呼ばわるものの声がする。「主の道を整えよ。荒れ地で、私たちの神のために、大路を平らにせよ。」(ルカ3章4節、イザヤ書40章3節)これは、ヨハネよりもおよそ七百年前に活躍したイザヤのことばからのそのままの引用です。人々が信じていたように、聖書にはイザヤが神から遣わされ、神の権威をもってバプテスマを授けたことが書かれています。

ヨハネは、やがて来られる主、イエス・キリストの道を整える役割を担っていました。谷があるのなら谷を埋め、山があるのなら山を削って低くし、でこぼこ道を平らにして救い主が歩きやすいように整える、というのです。では、ヨハネはどのようにして救い主が歩む道を平らにしたのでしょうか。

彼は、人の罪に対する神の怒りを説き、罪が赦されるための悔い改めに基づくバプテスマを説きました。罪を告白する者にはヨルダン川でバプテスマを授けました。そのようにしてヨハネは主の道を備えた、とすることができます。では、その後どうなったか。当時イスラエルの国王であったヘロデの怒りを買って、最期は首を切られてしまいます。死んでしまったら何もできません。救い主の道を備えるという、ヨハネの役割はそこで終わりです。

でも、本当に終わったのでしょうか。今日の箇所をもういちど読み直してみましよう。

## 2) 十字架に向かう道を備えるヨハネ

今日の聖書の場面では、ヨハネが殺されてすでに数年が経っていると考えられます。常

識では、死んでしまったヨハネはなにもできないはずですが、でもよく見てください。イエスを殺す口実を見つけ出すために、これぞ切り札と自信満々に質問をしてきた祭司長たち。彼らはどうなりましたか。イエスが、ヨハネの名を出した途端に急に弱気になり、こそこそと逃げ帰りました。ヨハネという名前が、あるいはヨハネがバプテスマを授けていたという事実が、イエスを守ったこととなります。でもそれは真理の一部に過ぎません。

大切なのはこの先です。イエスがヨハネのことを持ち出したことにより、祭司長たちは、人々の前で大恥をかき、プライドは大いに傷つけられました。その結果、何が起きたのですか。イエスは、祭司長たちの手によって十字架に追いやられていきました。ヨハネの名が、ヨハネのしていたバプテスマが、イエスを十字架に追いやったこととなります。

かつてイザヤが預言したことば。「主の道を整えよ。荒れ地で、私たちの神のために、大路を平らにせよ。」。ヨハネは、主が十字架に向かって歩まれる道をまっすぐにしていく。それがヨハネの役割であると、イザヤは語っていることとなります。

主は、祭司長たちの心の中の深い所にまで降りて行き、憎しみのマグマにスイッチを入れました。祭司長たちは、「神を愛しなさい」と教えていましたが、その同じ口からイエスを呪うことば、イエスへの怒りのことばがはき出されていきます。

私たちの内側にも同じものがあります。神を知ろうとせず、神を神殿から追い出そうとする自分がどこかに潜んでいます。自分こそこの神殿のオーナーである。神を前にして言い張っている自分がいます。そうやって神である方を十字架に追いやりました。

主は、神の権威を持っておられたのに、私たちに逆らわず、十字架ですべての権威を捨てられ、罪人の姿となりました。父なる神はその権威によって私たちをさばくことをせず、代わりに、ひとり子イエス・キリストをさばかれました。私たちは、神の権威によって罪が赦され、救われました。神の権威よりもすぐれた権威は存在しません。だれも私たちの救いを取り去ることはできません。そのような恵みをいただいていたことを思い起こし、主の御名をあがめます。